

子どもたちと出会う私

西隆太郎・伊藤美保子

ノートルダム清心女子大学には附属幼稚園・小学校があり、キャンパスにはいつも、子どもたちの声が響いています。春。新学期の訪れとともに、自由遊びの時間、共に保育を研究する私たちも、子どもたちと遊ぶようになりました。そこでの思い出を語り合う中で、保育を新たに学び感じることが多くありました。思い出をそのままに、言葉にしてみたいと思います。

四月

■砂場で（伊藤）

三歳の子どもたちが、初めて幼稚園にやって来ました。初めて、お母さんと離れて過ごします。

砂場で男の子が泣いていました。私は、「泣きたくなるよねえ」と声をかけました。

まわりの女の子たちが、「子どもと赤ちゃんは泣くよねえ」

そうすると、他の子たちも、

「大人だって、泣くかもねえ」

「お父さんだって、悲しい時は泣くかもね」

そう言っていました。

みんなお母さんと離れて、泣きたい気持ちは同じです。

■四月のうさぎ（伊藤）

初めて幼稚園を訪れて、とても楽しく遊んでいる子たち。

新しく眼に映るものに心を奪われ、はしゃいで過ごします。

中には、これから自分が幼稚園に入って、お母さんと離れた時間を過ごすようになるということが、まだよくわかっていない子もいるようです……。

それがいつか、わかる瞬間が来るようです。

園庭のうさぎを、ぎゅっと抱きしめている子。

本当に固く抱きしめているので、私がお母さんのうさぎなら、どんな気持ちになるだろう、と思います。

四月のうさぎは、こうやって抱きしめられるのが、役目なのかもしれません。

■あいす・くりーむ(伊藤)

幼稚園のうさぎは、子どもたちの人気者です。

「このうさぎの名前、知ってる？ あいす と くりーむ だよ」と教えてくれました。
「ふたりで あいす・くりーむ なんて、いい名前ね」

そう教えてくれたものの、自分でも、そうだったわけ……と思ったのか、先生にうさぎの名前を聞いていました。そしたら、バナラ と しろ だって、わかりました。

少しだけ、違う名前だったけど……。

あいす と くりーむ も、すてきな名前だったなあ、と思います。

五月

■道案内(西)

ゴールデン・ウィークも明けて、久しぶりに幼稚園を訪れます。

初めて出会う子どもたちもいて、私にいろんなことを話しかけてくれました。漢字がみんな書けるようになったこと(空中にすらすと書いてくれました)。

池のコイに餌をあげていること（私にもさせてくれました）。

グッピーの赤ちゃんが生まれたこと（みんなが自分の誕生日を教えてくださいました）。

やがて子どもたちが私の手を引いて、

「次は、ばらぐみでいっしょに遊ぼう！」「次は、ゆりぐみ！」

幼稚園じゅう、全部の部屋に連れていってくれました。

新参者には、道案内を。

そんなふうになんと迎えてくれる、子どもたちです。

■いきてる先生（西）

子どもたちから、「だれ？」「だれのおとうさん？」と、よく尋ねられます。

この前出会った子どもたちは、私の名前を覚えてくれていて、「にしんせい！」「にしんせい！」と「にしんせい！」と私の手を引いて歩くうち、私の呼び名もいろいろに変わっていきました。

遊んでいるうちに、たくさんの子どもたちが私の背中におぶさってきました。そこにやってきた男の子たちが、

「トンネルつくって！」

背中にのしかかっている子どもたちを懸命に押し上げ、お馬さんの格好をすると、私の体の下を、子どもたちがすり抜けていきました。その時、

「いきてるせんせい！」

「いきてるせんせい！」

なぜか、そう呼ばれました。

私もみんなと一緒に、その瞬間を生きている気がしました。

■明日(西)

そろそろ帰るころ。私のスリッパを取り上げて、「帰れなくなったよ！」と笑いかけられると、うれしいような、切ないような気がします。

「今日は本当にありがとう。また来週、遊んでね。」と言ってみても、

「あした！」「あした！」

みんなの声に包まれました。

子どもたちの心は、いつも明日に向かっていきます。

(ノートルダム清心女子大学)